



夢の話



matsu-ko

第一夜

こんな夢を見た。

私はその時、大学3年生であった。

あの時の不思議な体験は、大人になった今でも忘れられない。

あの人は今、どこで何をしているのだろうか。

「え。ちょっと待って。それどういうこと？」

「だからこれで過去に行って友達に会うのよ。早く乗りなさい」

戸惑う私に、母は容赦ない口調でそう言うと

有無を言わず、私を変な鉄板の上に立たせた。

「ほら、達也くんって覚えてるでしょ。中学校の同級生の」

「え・・・あ、うん、覚えてるけど・・・」

「その子の母親に会いに行くのよ。

あの子、今引き籠ってて高校にも行ってないらしくて。

本当なら、もう高3なのにね。

だからあんたはその子と話して、

少しでも外に出たくなるようにしてやりなさい。

・・・さあ、着いたわよ」

そう言われて前を見てみると、

いつの間にか見知らぬ家の前に立っていた。

「その子の部屋は2階だからね。私は下でお母さんと話してるから」

「・・・ちょ、ちょっと待って！

今、高3って言った？私、今大学3年生だよ。

同級生なんだから、達也君だって大学生のはずでしょ？」

「『今、この時』の彼は、18歳、高3なのよ。

・・・だから、言動には十分注意しなさい。

彼は、あなたが未来から来たことは、知らないんだから」

そう言うと、母は戸惑う私を置いて、さっさと中へ入って行ってしまった。

しかたなく、2階へ上がる。

廊下の正面にドアがあった。この部屋だろうか。

恐る恐る部屋のドアをノックすると、

「誰？」という声とともに、ドアが開いた。

そこには、中学校の頃の同級生がいた。

記憶の中の顔より少し大人びた顔の同級生は、
私の顔を見ると、驚いた顔をした。

「・・・どう、したの？」

「あ、うん、久しぶり。母さんに言われて会いに来ただけど・・・」
何と言っていいのか分からず、語尾を濁すと
彼は戸惑いながらも、私を部屋に入れてくれた。

「・・・あ、そうなんだ・・・とりあえずどうぞ」

その日は、私の高校時代の思い出なんかを話して2人で楽しく過ごした。

それからというもの、私は度々その子を訪ねるようになり、
彼はいつも突然訪れる私に驚きながらも、
快く迎え入れてくれていた。

始めは、よそよそしかった彼も
回を重ねるごとに、だんだん親しげに話すようになってくれて・・・。
私はいつのまにか、彼に淡い恋心を抱き始めていた。

そうして何回目かの訪問の時、
私は、部屋のテーブルの上に高校のパンフレットが置いてあるのを見つけた。

尋ねてみると

「高校行きなおそうかなと思って」
と恥ずかしそうに打ち明けてくれた。
ああ、やっと思いが通じたんだ、と思った。

しかし、そんな矢先。

その子の同級生であり、
まだ高校3年生でなければいけないはずの私が
つい混乱して大学でのことを話してしまったことで、
脆くもそんな楽しい時間は崩れ去った。

それまでにこにこと無邪気に笑って
私の話を聞いていたその子が
突然私の耳元に顔を寄せ、低い声で囁いた。

「ねえ、高校3年生であるはずの君が、なんで大学の入学式のことを知ってるの？」

驚いてとっさに見上げると
暗い顔でニヤリと笑っている彼の顔があった。

(飛び級して大学に受かったから)

そんな言い訳がちらりと頭をかすめたが、
そんなことはアメリカなどの外国ならまだしも
この日本では有り得ない。

私は混乱を隠しきれず、
ただただ俯いて涙を流しながら
首を横に振っていた。

「お願いだから、それ以上聞かないで」

ちょうどその時、
ドアの向こうから母親の帰りを告げる声が聞こえてきたが
それに「もうちょっとだけ待って」とやっとのことで答え、
その子を見上げた。

「今度来たときに全部話すから」

そう言ってドアの外へ出ると
母親が私を呆れた目で見ている。

「ばれたの？あんた馬鹿じゃないの？どうするのよ。
それに、あんたのせいでもうこんな時間じゃない。
まだ夕飯の準備もしてないのに。
絶対父さん、私たちの帰りが遅いって不機嫌になってるよ」

そう言って前を見た母親につられて
私も前方に目を向けると
ぼう・・・と目の前に今までとは違う景色が映った。

その中にこちらを見る父親の姿もあって。

「おかえり。遅かったね。それじゃあ、夕飯にしようか」

父親は突然目の前に現れた私たちに驚きもせず
穏やかに笑った。

（ああ、父さんも母さんが作ったタイムマシーンのこと知ってたんだ・・・）
と、私はどこか冷静な頭で思った。

それから、私は過去に行くこともなく
あの子にも会っていない。

第二夜（前編）

こんな夢を見た。

私は気づくと旅をしていた。
枯れ葉の落ちる山道を数人の仲間と登っている。
前を歩いているのは、子供連れの家族だった。

皆、背中には大きなリュックを背負い、分厚いジャンパーを羽織っている。
一步一步進む度に、足もとで枯れ木の擦れる乾いた音が響いた。
辺りは暗くなり、見上げた空は今にも涙を流しそうな気配である。

突然冷たい風が吹いて、私はぶるっと身震いをした。
「山の夜は早い。長旅になるんだ。今日はこの辺で、どこか泊まれるところを探そう」
誰かがそう声をかけた。

しばらくして見つかった小屋は、ずいぶん長い間放置されていたのか、
中には落ち葉が入り込み、クモの巣もあって、とても長時間居たいとは思えぬ場所だった。
しかし、雨風が防げるだけましである。皆しぶしぶ、ここで一夜を過ごすことにした。

そうして、人々が床に座り込み、寝袋の準備をしているのを見てふと思った。
ここにいる人々は皆、今までかなり良い生活をしていたのだ、と。

――一夜逃げ。

唐突にそんな言葉が脳裏をよぎった。なぜかは分からない。
その時、私は言いようもない胸のざわめきを感じた。
私は何かを忘れている。いや、思い出しかけている。

――違う。

ふと、隣を見た。7歳くらいの男の子が仰向けで寝ている。
いや、倒れているのだ。
男の子の体の上に、白い何かが跨っていた。
その物体は白い手を伸ばし、男の子の首に手をかけ――

『きゃ――』

どこからか女性の甲高い悲鳴が響いた。
その白い物体に顔が浮かび、その声に反応したように顔がゆっくりとこちらを向く。
白い顔にぽっかりと空いた2つの穴。本来眼があるはずのそこには、何もなかった。

そして、その下の顔が裂け、大きな三日月型の口となり・・・・・・笑った。

『 』

その瞬間。

様々な映像が脳裏を過った。

第二夜（後編）

2年前に、山小屋で起きた事件。

小屋の中からは、6歳くらいの男の子の遺体とその両親と思われる一家の遺体が発見された。

遺体は灯油を頭から被っており、遺体からの身元判断は困難とされた。

しかし、幸いにも所持品の一部が焼け残っており、免許書などから家族の身元が判明。

元建設会社社長とその一家だと分かった。

その家族の父親は、一時期名を馳せた建設会社の社長だったが、

バブルの影響で会社が倒産。

多くの借金を抱え、事件の数日前から連絡が取れなくなっていた。

家財道具はそのまま、汚れた食器などもテーブルの上に置かれたままであったことから、

夜逃げした結果の一家心中と判断されたのだった。

その後、事件のあった小屋は、誰も近づくことなく放置されたのだが、

——— 違う。

違う、違う、違う違う違う違ううちがうちがうちがう t . . .

『後の手配はこちらでしています。朝方また迎えに来ますので、今夜だけはここで———

社長？なにを———うわああああああああああああああ』

『すまないね、これ以外私たちが助かる方法はないんだよ。

それと、お嬢ちゃんには、皆とは別のところで眠ってもらわなきゃな。

何せ、うちには娘はいないからな』

手に触れる温かい何か。

苦しい。

———お母さん、お父さん、かずや!!!

気がつくと、私は小さな男の子の上に跨がり、その小さな首に手をかけていた。

冬も間近になった晩秋のある日、

例の山小屋の近くを歩いていた地元の住民が、

落ち葉の中に埋もれていた中学生くらいと思われる少女の遺体を発見した。

身元調査の結果、

その少女はあの一家心中事件で話題となった建設会社の元従業員の娘だと分かったが、

その家族とは連絡がつかなかった。

というのも、あの事件とほぼ同時期に、姿を消していたからである。

さらにその前日、ある一家で謎の絞殺事件が起こっていた。

被害者は8歳の少年で、第一発見者は住み込みの家政婦だったのだが、

その子の母親はわが子の遺体を見るなり発狂し、自分と子供、さらには夫にまで灯油をかけ心中してしまった。

その家政婦は、事件発生直後に、中学生くらいの背丈の白い少女を目撃したと証言した。

こんな夢を見た。

私は気づくと旅をしていた。
枯れ葉の落ちる山道を数人の仲間と登っている。
前を歩いているのは、子供連れの家族だった。

皆、背中には大きなリュックを背負い、分厚いジャンパーを羽織っている。

ふと、前を歩く男の子がこちらを振り向いた。
——あ、

『おねえちゃん、迎えに来たよ』

「どうしたの？早く行こうよ！お父さんとお母さんも一緒だよ！！」
「——うん！」

それからというもの、その一団を見たという者はいない。